

趣味の川柳

札幌市医師会

しばた むつお
柴田 睦郎

道医報一月号の北海道医歌人会詠草を読ませていただきました。道内各地の歌人の先生からの一句立て短歌の連作でそれぞれ題名付きでした。会として活発に活動されている点敬服し、つくづく羨ましいと思いました。

私の趣味である川柳は愛好家の高齢化で道内の吟社が続々と休会、解散しています。私自身は「川柳きやり吟社」という東京の伝統川柳（定型遵守、日常茶飯を口調の良い明るい川柳で詠むが社）の吟社の同人（社人）です。この吟社は来年が創立百五年と古い歴史を誇ります。かつて社人は百人限定と謳っていたのですが高齢のため退会する社人が多く、会員も高齢のため補充もままならず、現在社人は七十人台に減っています。

対して短歌は昨年口語短歌の確立で紫綬褒章を受章した俵万智さんを代表に若い作家が続々と登場しています。新聞の日曜版を見ても俳句と並んで短歌のコーナーは依然として充実しています。文芸欄には評論（俳論、歌論）が掲載されても川柳の評論などは掲載されません。短歌・俳句はテレビ番組もあり総合雑誌の発行は勿論ですが句集、歌集の刊行も盛んですし結社の活動も盛んです。我が川柳はNHKラジオの文芸選評からもいつの間にか姿を消しました。

時事川柳や万柳は常連も多く、企業の公募川柳（いわゆるサラリーマン川柳など）の応募者数などをみると川柳は衰退傾向にはないように見えます。しかし文芸としての吟社川柳は衰退の方向にあると悲観しています。

ただ定型短詩として短歌の構造575(上の句)77(下の句)をよく見ると長歌の反歌としての位置づけとは別に連歌(句)、俳諧の前句(77)に附句(575)するという川柳の成り立ちに関連する構造が見えてきました。そもそも川柳という文芸ジャンル(575)の名称は俳諧の習得手段である前句付け(77の前句に続く句を作る)の宗匠である柄井川柳の名前に由来するのです。

俳句と川柳の違いは挨拶の句である俳(諧の発)句(575)が季語や切れ字を含むのに対して平句の川柳(575)には季語や切れ字は必要としないという点があります。別に武玉川という名前の定型短詩(77)もあり時には川柳に含めることがあります。武玉川の実例は「取り付きやすい 方へ相談」「二つ重なる ささやきの傘」などという物です。

今後も歌人の諸先生の作品を熟読玩味して文芸としての川柳を磨きたいと考えています。

ダンシング・オールナイト

恵庭市医師会
恵み野病院

はしもと ひろし
橋本 博

新しい年が始まりましたが、特に変化もなく、平穏な日々を過ごしています。ただ体力と記憶力の衰えは、しばしば自覚するところで、時に不安にもなります。最近、同世代の有名人の訃報が多く、その不安を助長する要因ともなっています。もんたよしのり72歳、大橋純子73歳、八代亜紀73歳、谷村新司74歳……。私は昭和30年生まれ、今年の誕生日で満69歳になりますので、彼ら、彼女らは、いずれも私より若干年上ですが、同世代の愛着を感じます。きっとこの人達の歌に大きな魅力を感じながら過ごして来たからでしょう。

いわゆる長寿社会で、80台くらいまで、生きていられそうな気がしてしましますが、(きわめて当たり前のことですが)平均寿命で一斉に逝ってしまうわけではなく、私の年代くらいから90歳ころまで、少しずつ他界し、その結果の平均寿命なのだ、あらためて感じる次第です。

今の若い方は、「ディスコ」と言う言葉をご存じないかも知れませんが、1970年～1980年代前半くらいに全盛期を迎えた、ダンスホールに近い存在がありました。生バンドではなく、レコード演奏でアップテンポな曲や静かな曲を流し、ウィスキーの水割りを片手に、静かに曲を聴いたり、時に踊ったりしたものです。もんたよしのりの「ダンシング・オールナイト」が今も耳の奥に響きます。さてあと何年生きられるか、全くわかりませんが、人の記憶の片隅に、少しでも残るような生き方をしたいと思う、今日この頃です。

写真は、最近手に入れたゴッホの「ひまわり」のレプリカです。以前から好きな絵のひとつで、先日東京のSOMPO美術館で手に入れ、仕事場の机の横に飾っています。15輪のひまわりは、キリストの12使徒、盟友のゴーギャン、弟のテオ、そしてゴッホ自身を現わしているのだそうです。

